

マラツカ断章

のむら とほる
野村 亨

けたたましい物売り女の嬌声と、行き交ふ人力車の車輪の軋みが渦巻く市場の雑踏を抜けて、ふと薄汚れた煉瓦塼の角を曲がると、異様な形のミナレット（光塔）¹が目に飛び込んできた。塔の傍らには、中国・アラブ両様式の混つた、この地方独特の造りの門が設けられ、その鴨居には「カンポン・クリン回教寺院」と記されたアラビア文字が扁額に踊ってゐて、街行く人々に、ここがアツラーの御寺であることを告げてゐる。

膚を刺す南国の強い陽射しに我が身を苛まれてゐた私は、日陰に一時の憩ひを求めて、思はず知らずモスクの境内に足を踏み入れてゐた。

靴を脱いでテラスに上ると、タイル貼りの床がひんやりと心地よい。熱砂の砂漠を行く旅人がオアシスのなつめやしの木陰に憩ふ時にはこのやうな気持ちを抱くのだらうか？

幾何学文様の透かし彫りで飾られた勾欄からこぼれる陽射しの中を歩む。

回廊をまがると、室内から朗々たる聖典クルアンの朗誦の声が響いて来た。

回廊の一隅に絨毯を鋪き、その上に端座して一心に聖典を唱へるサロン²姿の老回教徒は、一体幾星霜の間、断食月をこのやうにして過ごしてきたのであらうか？

アツラーの神の御旨のまにまに、日長一日モスクで過ごすムスリムたちの上を、時は大河のごとく流れてゆく。

「のう、そこの若者、そこもとはいづこより参られたのぢやな？」

と呼びかける声に振り向くと、先ほどまで傍らで昼寝をしてみた六十年輩の白髭豊かな老翁が、いつ起きあがつたのか、莞爾としてこちらを見つつ、サロンの居住まひを正してゐる。

よく見ると、陽焼けした彫りの深い顔つきにはどことなく気品が感ぜられ、唇の間から見える歯が、キラキラと真珠のやうに輝いてゐる。



1 イスラム寺院に付設された塔をいふ、ミナレットは光塔と訳されるが、その語源については、昔、これを灯台代りに使つたため、あるひは、人の心に信仰の光を灯すためこのやうに呼ばれる、など諸説があり、一定してゐない。ミナレットは一般に、中東以東は円形、北アフリカないしイベリア半島では角形といはれてゐるが、マラツカのミナレットは中国の仏塔の影響を受けたものが、角形をしてゐる。

2 マライ人男女が日常着用する腰巻。

「それがしは、日本よりこの国の歴史を学びに参つた者でござる。卒爾ながら、モスクの中を拝見しても宜しうござりませうか？」

と、恐る恐る尋ねると、老人は満面に笑みを浮かべて

「はるばるとよくこそ参られた。ああ、アツラーの他に神なし。われらの今日ここに相見ゆるもまた、神の御意思によるものぢや。アツラーの御名は誓むべきかな。ささ、何処なりと御見学なされよ。」

と答へた。

堂内の撮影と見学とを終へた私が、先刻の老人のところに戻ると、かの翁は私に座を勧めた。



「これに坐して、ごゆるりと休息なされよ。」

「かたじけない。」

「御老人、いまは断食月と聞きおよびますが、まことでござるか？」

「いかにも。我等ムスリムの務めとて、毎年かうして断食を行つておるのぢや。」

「されば、今年の開齋節（イードル・フヰトリ）³はいつごろでござりまするか？」

「さやう。まだ半月ほど先のことぢや。」

「ときに御老人、つかぬことをお尋ね申すが、御身の

御出自はこのマラツカでござりまするか？」

「いや、我らはマライ人ではない。アラブの民なのぢや。」

老人の話に興味を抱いた私は、おもはず彼のほうへひと膝にじり寄つて、さらに質問を重ねた。

「しからは、御国許は何処でござりまするか？」

「西の方、大洋と砂漠のかなた、イエメンの地ぢや。」

「道理こそ、最前より御顔つきが、他の人々と異なつてをられると思つてをりました。アラブの民の御身が何故にこのマライの地に参られた？」

「若き日に、船乗りなる叔父とともに、舟に打ち乗り、彼方此方を漂泊するうちに、いつしかこの地に住みつき、神の御意志のまにまに、早や頭に霜を頂くようになつてしまふた。」

ここまで語ると、老人は、ふと遠くを見つめるやうな目つきになり、暫し沈黙した。

異国の若者の問ふままに、思はず口にした故郷の名に、久しく眠つてゐた故郷への思慕が老人の胸中を去来したのかも知れない。

この老ひたる船乗りシンドバツドの身の上に過ぎし歳月、アツラーの神は一体いかなる運

³断食月明け、つまり回教曆、十月一日を「ハリ・ラヤ・イードル・フヰトリ」と称し、イスラム教徒たちはあたかも我国の正月のごとくこれを盛大に祝ふ。

命を降り給ふたのであろうか？

遠くを見つめる老翁の澄んだ眸は、あたかもアラビアの砂漠の夜空を彩る無数の星のひとつが彼の目に降り立つたかのやうに感ぜられた。

気がつくと、内庭にはすでに陽の影が長く伸び、陽溜りのなかで、鶏が二羽、餌をついばんでゐる。

懇ろに礼を述べ、老人の武骨な手を握つて、長寿を祝福しつつ辞去すると、彼は一瞬淋しさうな表情を浮かべてかう言つた。

「もう行かれるのか？ 神の御名によりて、汝の旅路の上にアツラーの平安があるやうに。」

「御老人も随分と御達者で過ごされませ。」

内庭を抜けて、門口まで来た私が立ち去りかねて振り向くと、老人はふたたび横になつてまどろんでゐた。中庭ではムーア風の噴泉が、音も無く水を噴き上げてゐるばかりであつた。

アラブの血 色濃くまぢる 老翁は

ラマザン明けを 日なが待ち暮らす

(1986年)



マラッカ、カンボン・クリンモスクの前の筆者
(満34歳)、
1986年4月8日

1985年から87年にかけてマラヤ大学文学部に留学した。その際、何度か古都マラッカを訪れた。この文章は留学当時、マラッカを訪れた際の経験をもとに綴ったものである。

無断転載を禁ず。
2003年4月23日改稿